

平成 30 年度 研究成果報告書
Research Achievement Report FY2018

講座名・職名 Course Title・Job Title	日本語日本文化専攻 講師
氏名 Name	儀利古幹雄
専門分野 Academic Field	音韻論・社会言語学

主たる研究テーマ Principal Research Subject	音象徴と世代差
<p>本研究の目的は、音が何らかのイメージを直接的に喚起されると言われる音象徴に、世代差・文化差は観察されるのかという問題を明らかにすることである。より具体的には、阻害音は「男性」、共鳴音は「女性」をイメージさせるというのが、これは世代を超えて当てはまるのかという問題である。</p> <p>本研究では、阻害音で構成された名前（例：サタカ）と共鳴音で構成された名前（例：ワmana）を 20 個ずつ用意し、ランダムに配置し、それをインフォーマントに提示して、その名前が男性のものであるか女性のものであるかを判断させた。インフォーマントは東京方言話者の男性 20 名、女性 20 名であり、世代別にみると若年層 20 名、高年層 20 名となっている（男性若年 10 名、男性高年 10 名、女性若年 10 名、女性高年 10 名）。</p> <p>その結果、世代が変わっても、阻害音は「男性」を、共鳴音は「女性」をイメージさせるという結果が得られた。ただ、世代によって程度が異なっており、高年が阻害音で「男性」をイメージする頻度、共鳴音で「女性」をイメージする頻度はどちらも 75%程度であったが、若年層では 55%程度にとどまった。なお、性別によって有意な差は観察されなかった。</p> <p>このことは、高年は「男性とはこうである」「女性とはこうである」といった固定観念が強いことを表している。より正確に言うと、今回「高年」として扱ったのは 60 歳以上のインフォーマントであるので、60 歳以上のインフォーマントにこの傾向はより強くあてはまるということである。逆に若年層のほうでは、阻害音で構成された名前を「男性」と判断する頻度、共鳴音で構成された名前を「女性」と判断する程度は先行研究で述べられているように高かったが、その差は統計的に優位であったとしてもわずかなものであった。ここから、高年層で観察された「男性のステレオタイプ」「女性のステレオタイプ」が、若年層では社会情勢に合わせて崩壊してきているといえる。</p> <p>本研究は、これまでの研究で扱われてこなかった「音象徴における世代差」を明らかにしたという点で、大変有意義なものである。今後の課題としては、日本語話者以外のインフォーマントに同様の調査を行い、どのような結果が出るか確認することが挙げられる。</p>	